

いく母とおいかける私

やまだようこ

1 お母さん！ あなたはどこへ行くのですか？

お父さん！ お父さん！ あなたはどこへ行くのですか？

ああ、そんなに早く歩かないでください。

話しかけてください、お父さん、さもないと僕は迷い子になってしまおうでしょう。

図1は、「幼いときの母と私の関係」をイメージして描いた女子大生の絵のうち一枚である。今回はこの絵を核にしたが、母子関係のさまざまなパターンを考え

てみたい。

図1には、一本の道が描かれている。この道は、上へ上へと伸びており、さらに山また山を越えて果てしなく続いているようにみえる。お母さんは、この道をどんどん走っている。子どもも、けんめいにお母さんを追いかけて走るのだが、追いつくことは難しそうである。

子どもは走りながら手を振り上げて、「お母さん、ちょっと待って、そんなに早く行かないで！」と呼びかけているかのようである。けれどこの母は、足を緩めて子どもの歩調に合わせるところか、子どもの様子を見た

私が母を追いかけるがぜんぜん追いつかない。
あまり、話した覚えがない。
いっしょにすごした覚えがない。



▲図1 上に向かって行く母を追いかける私

めに振り返る気配さえない。

この絵には「あまり話した覚えがない。いっしょにすごした覚えがない」と説明がつけられているが、この母は子どもにやさしい言葉をかけて、足の痛みをほぐしてくれることもないだろう。

わたしは、この絵をみてすぐに、前記に引用したようなブレイクの詩句を思い出した。この詩句は、大江健三郎氏の小説『父よ、あなたはどこへ行くのか?』の中で始めて出会ったものである。

ここで「あなたはどこへ行くのですか?」と呼びかけられるのは、「お父さん!」でも「お母さん!」でもよい。場合によっては、「先生!」「師匠!」「先輩!」「神さま!」などと呼ばれるかもしれない。それらの名前は慣用化された記号なのだから、その名前で意味されるものに必ずしも本質的な違いがあるとは限らない。

したがって、通常どのような名前と呼ばれるかということ、つまり「母」という名前にはこだわらないで、そこに表現されている、「人」と「人」とを結び二者関係

の基本的なありかたに目を向けてみたいと思う。

2 話しかけてください、お母さん、さもないと迷い子になってしまってください。

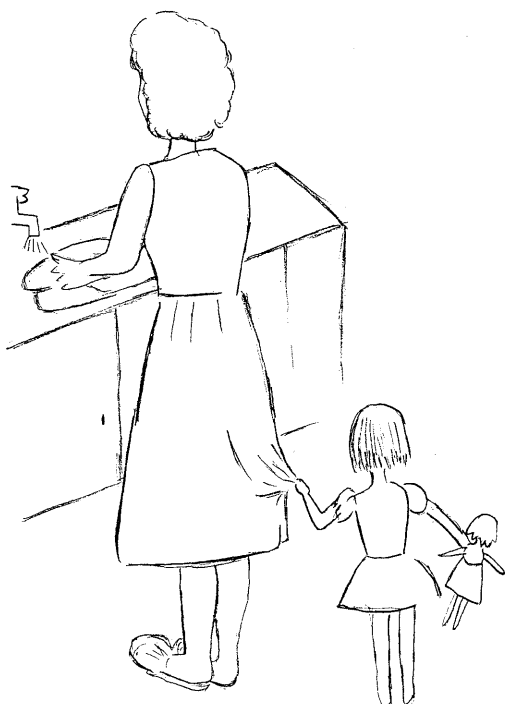
先にわたしは、二者関係の基本構図をまとめて、母子関係の網目モデル(その1 参照)を作製したが、図1は、そのなかで『いく母とおいかける私』の構図のひとつとして位置づけられる。

この構図は、あたたかく身の内に子を包みこむ『つつむ母といれ子の私』の構図(『私をつつむ母なるもの』有斐閣参照)や、子どものために土台や傘や盾や支柱になつてつくす『ささえる母ともたれる私』の構図(その1)とは対極にあるもののひとつである。それらの絵では、母よりも子が中心で主導権は子どもの方であったが、「いく母」では逆だからである。

またこの構図は、二人が仲良く手をつないで並んで微笑みながら歩く友達のような関係『並ぶ母と私』の構図とも、相対する位置にある。母は、子どもに合わせて子

どもと共に歩くことはなく、自分の道を自分のペースで先へと進んでいるからである。

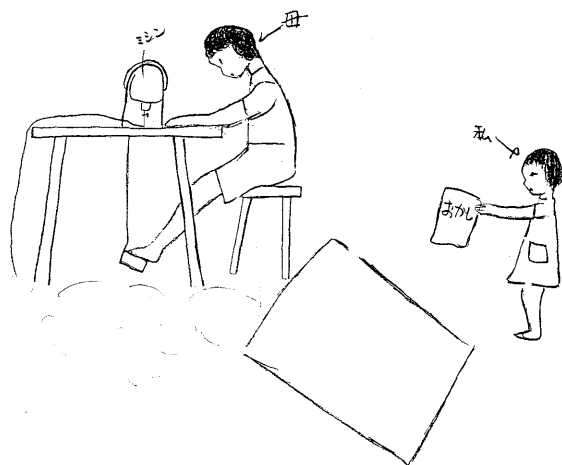
このような母は、冷たいようにみえるだろうが、必ずしもそうではない。子どものために犠牲になって生きて



母は働いていたし、末っ子でもあったので、いつも母にくっついていました。

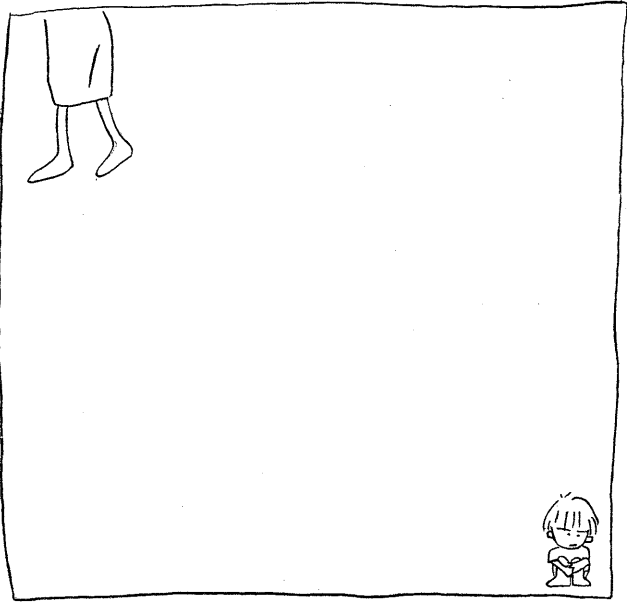
▲図2 母の後ろでスカートをはひっぱる私

くれる母をもつことは、有り難い反面、重荷にもなる。子どもをどっしりと支えてくれる母は頼りになるが、ふ



お母さんがミシンの内職をしている時に、私がお母さんに「お菓子食べていい？」と聞いている所。

▲図3 母の後ろから菓子袋をさし出す私



▶ 図4 母と離れて部屋の隅でしゃがむ私

一人っ子なのにかわいがってもらえずいつもひとりてくらかった。母親は若くて、ヒステリーだったので、とてもこわい存在だった。

かふかと温かい安楽椅子から子どもが自分で離れるのは大変で、独り立ちするには勇気がいる。「いく母」の場合には、母の方から身を低くして子に手をさしのべることがないかわりに、母の手の中に閉じこめられて窒息しそうな苦しみは少ないだろう。

だが、背中を向けて「行く母」を、私が追いきれなかったり、私の呼びかけにもかかわらず母が応えてくれなことが重なると、母と私のあいだの距離がどんどん開いていく危険はある。図2から図4を順次みていくとわかるように、その距離が埋めがたい空白になってしまう場合もある。

図2では、子どもは台所仕事をする母の後ろでスカートをしゃっかりつかんでおり、離れまいとしている。

図3では、子どもは「お母さん、おかし食べていい？」と言いなながら精いっぱい手を伸ばして菓子袋をさしだしているが、背中を向けて仕事する母との距離は、かなり開いており、子どもの手は母の所まで届きそうにない。母も振り向く様子がみられない。そして二人のあ

いだには、越えがたい「溝」や「ギャップ」があることを象徴するかのように、四角で囲った線が描かれている。

図4では、二人のあいだは決定的に離れており、私は、もはや母を追いかけようとはせず、呼びかけることも、手を出そうともせず、ひとりぼっちで部屋の隅で、ひざをかかえてしゃがんでいる。

これらの子どもたちは、寂しそうな表情をしており、「お母さん、振り向いて、私の方を」「話しかけてください、お母さん、さもないと迷い子になってしまうでしょう」と訴えているようである。

3 夢の国はあんなに遠いのに、明けの明星の光の上にあるのに。

お父さん、ああ、お父さん！

僕らはここでなにをしているんですか、この不信と恐怖の土地で？

夢の国はあんなに遠いのに、明けの明星の光の上にあるのに。

母性愛の信奉者は、あたたかく子を包みこむような母や、子のために身を犠牲にする母だけを理想と考えがちである。しかし母子関係は、あらゆる人間関係と同様にワンパターンではありえないし、これがベストというような母子関係の公式があるわけではない。長所と短所は裏表であるから、どのような母のあり方もそれぞれの良さをもっている。

「いく母」は、子どもの方に降りて身を添わせるやさしさはないかわりに、「進むべき道」や「目標」や「高み」をもち、母自身が「走る人」であるところが素晴らしい。

ブレイクの別の詩句のように、このような母は、少し先を行く先輩にすぎないから、子と同じように迷い子になる危険をもつ。子も寂しいが、母も恐怖や孤独と無縁ではない。しかしそれは、理想や高みをめざす限りついてまわるものだから、それに独り耐えられる力をつけることも必要である。

また子どもは、母が熱心に努力する姿を見れば、自発的に追いかけることも多くなるだろう。子どもは母の「背中」を見て育つ。子どもは、母を「見本」「手本」「モデル」として、母から技を盗みとろうと工夫をこらす。

このような関係は、日本の伝統的な師弟関係によくみられる。同じことでも自ら目標をたて自主的にやる時には、発揮する実力は何倍にもなるから、教育的機能が高い、しかも、目の前にレベルの高いモデルがあれば、追い越そうと励む力も増すのである。

次のような岡本太郎氏の場合は極端にしても、母と子の関係の仕方はさまざまであること、そしてそれぞれに良さがあることを私たちに教えてくれる。

私の母（岡本かの子）は歌人だった。父は朝から新聞社に出て行き、帰りは夜遅くなる。まる一日、家の中はひっそりしている。母と私と二人きりだ。母は文学に情熱を燃やし、一日中机に向かって本を読んだり、書きものをしていた。

幼い私はまったく無視されていることが不満で、母の背に飛びつき、何とか相手になってもらおうとする。母はうるさ過ぎて、兵児帯を私の胸に巻きつけ、その端をそこらの柱とか簞笥の縁に結びつけてしまう。犬っころのように。

明るい障子、庭に面した机に向かって、ばざりと黒髪を背にたらし母の後ろ姿……それは私の眼にやきついた強烈な思い出だ。半日もその背中しか見えない。いくら私が泣いても畳の上でもだえても、振り向いてくれなかったのだ。

画家の中川一政は学生のころ、家をたずねて来てその情景を目撃してさすがにあきれたそうだ。確かに私もいたずらっ子だったが、母も普通ではなかった。私を愛していたことは事実だ。けれどこまごまといわゆる母親らしくかまってくれろということとはまるでなかった。不器用だし、出来なかったのだから。

だが、それでいながら私はそんな母が好きだったし、憧れていた。縛られて、辛くて、悲しみ泣きわめきながら、しかしそのみじんも動かない母の後ろ姿に、何か神聖感を覚えた。

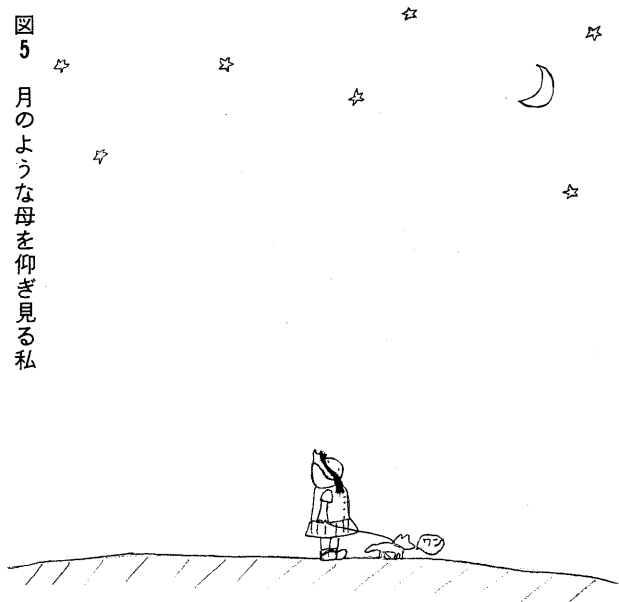


図5 月のような母を仰ぎ見る私

母は内職やおつとめてあまり接したことはなく、近づきたいのに近づけないお月さんの様でした。
私もそれをながめるだけで真近の友だちと遊ぶばかり。
母と遊んだ思い出はほとんどないのです。

世話をしたり、愛撫してくれることだけが母親の役目ではないのかもしれない。孤児のように勝手に生い育ちながら、私は母と強い一体感を抱いていた。

(岡本太郎「自伝抄1」より、読売新聞社、一九七七年)

「夢の国」や「明けの明星の光」をめざして自ら「いく母」は、子どもに尊敬され仰がれる母となることも多い。その意味で『いく母とおいかける私』の構図は、図5のような『そそぐ母とあおぐ私』の構図にも近づいていく。子どもに迎合する甘いキャラメル・ママに比べ、と、厳しさと尊さをかねそなえた近づきたいほどの崇高な母は、今では少数派であるうが、そのような母をもつ子はそれなりに学ぶものも多いにちがいない。

(愛知淑徳大学)